



近世名家書畫談二編

二



近世名家書畫談二編卷之二目次

- 畫妙の奇恠ハ寓言ある事
- 文字紙以て圖畫とせし事
- 方西園富嶽を寫せし事
- 唐婦尺牘
- 伊孚九の名の事
- 三酸圖誤りの事
- 春畫火災を除くことし事
- 漢土浮世繪師の事
- 英一蝶女達磨の圖



近世名家書畫談二編 卷之二目次

一

唐一王維が輞川圖を以て病を愈ゆるをその事ハ養神と
しつゝ又獺の皮を寝て瘟を去り其形を以て邪を
辟るの類ハ壓勝といふものにして繪馬の奇異をとある安
談と混むるものぞん

譚子化書云老楓化為羽人自無情而之有情也
賢婦化為貞石自有情而之無情也とは寓言な
るべし 此邦の松浦佐夜姫の望夫石とありしといふ
此言を以てより出づるもの因ふ此比桂川冥君が
隨筆に見し浅草繪馬の落款に載て所提筆と
ありと記せり
望夫石の本事ハ劉義慶
の幽明録に出るとし

文字を以て圖畫とせし事

南畝翁説ふ世に劍を乘する仙人の圖に上利劍といふ
誤りありしは呂純陽の海に渡る像なるを以て詩話
類編に王文恪が純陽渡海の圖に題して扇作帆兮劍
作舟と書くるより見ゆまは純陽なること明くして列仙
傳の鍾離權とハ大に異なりさきと香祖筆記に陳仲
醇云漂陽人家有鍾離權畫花押如一劍狀則是神
仙亦有押字とありまは上利劍の名の誤りハ是より出る
あるべしと云り按るに二幅對し一僧衣に縫圖にして
朝陽と云又一僧月を誦經のさほは是を對

月と云傳一多きといふある祖師といふ者哉知る者あり
こま六祖師の名ふありて古人の句哉図せし其の款
朝陽補破衲對月了殘經と云句ありて此邦の
和歌の心をて哉図せし其のあり和漢同意と云ふき

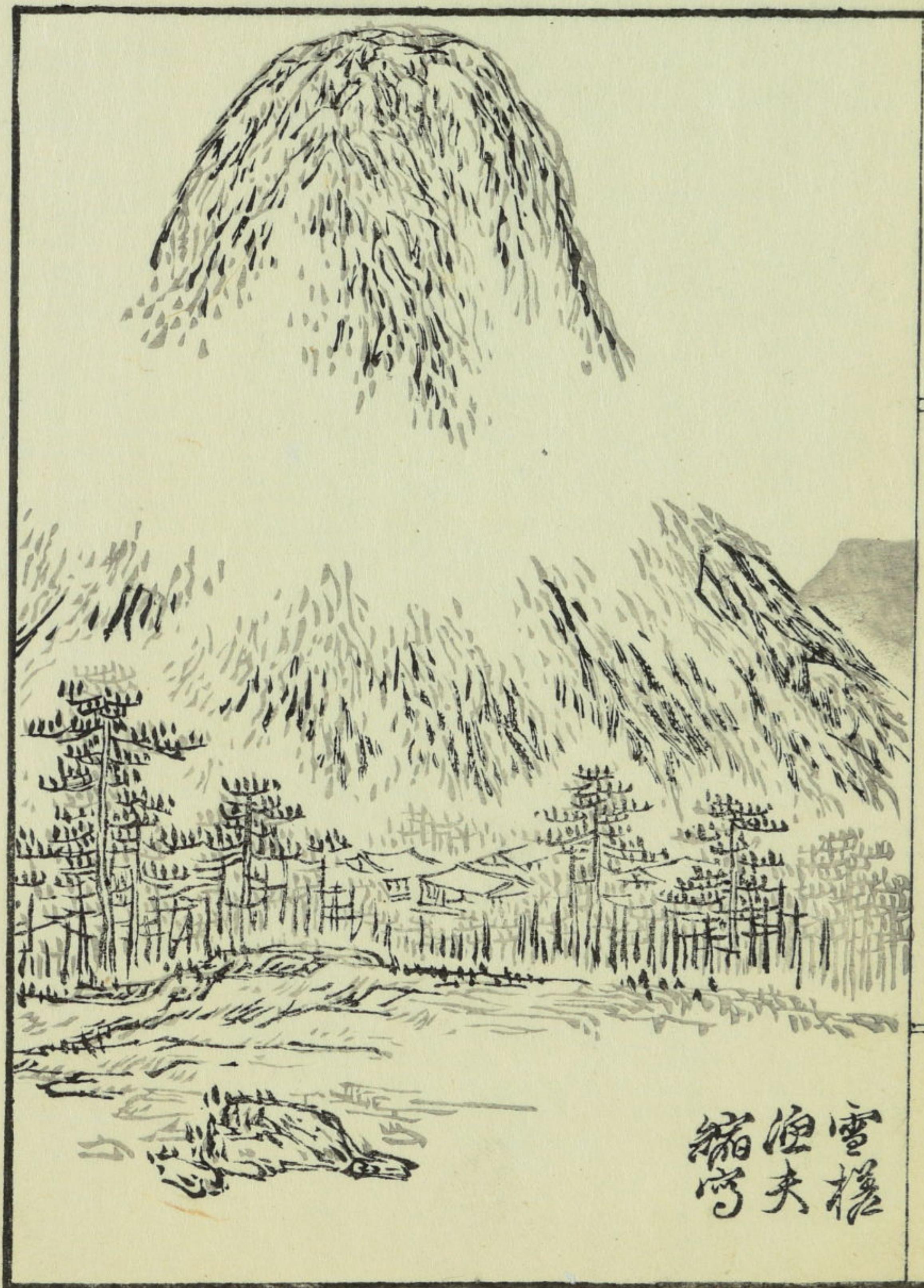
達磨芦葉小乗せしと云ふ船の事なり詩經國風一葦航之赤舄賦一葦
之所如也皆舟哉葦と云是又文字也壽老人小蝙蝠と鹿を添て福祿壽の圖
せし蝙蝠と福鹿と祿の音通なり又鍾馗小蝙蝠哉そし降伏の伏と蝙蝠の音通なり

方西園富嶽哉寫せし事

理齋歸路日記云安永の次ふ也唐船一艘房州漂著せし
事ありその以ふ来商せる唐人ハ猶長崎ふいある者かの漂
著せし唐人ハ初て日本の富士哉見て甚よろこびといふ

彼船小乗渡りし方西園といふ者畫哉善せりよつてまの
あり富士哉寫して國小帰まると人々競て富士の景哉と
り依て今ふ方西園が富士ハ人々珍重するなりといふ

理齋ハ唐土一漂流せし人ふて彼ふありて人々の方西園
が富士哉賞玩すること哉まのあり見る人あり此邦
ふてを唐人の図せし彼土の名山勝蹟の圖ハ尤賞玩せ
るべきことふしそ因ふ云谷寫山が摸せし漂客奇賞圖と
云一卷あり是方西園房州より崎陽一護送せし道
路見し雲の真景なりよき山水の手本なりと近來
京畫師在中が画し富士寫真圖哉見し小寶永山水哉



雪橋
漁夫
縮寫



唐子
秋在
月
寫於
重
九前
三日
在國
濟

見せり是東海道西方より望見する雲の圖なり東海
道東方江戸より箱根阿より望見する時ハ彼山
見せり由ふ富ふ峯ふ是は東方より望見する所を寫せばききあり
少水四君子圖をとりて書き多し却て画格ハハ
宗嗣祭日富士峯紙寫を者ハ探幽齋たんゆうさい法格ハ效こう先
ハ其清趣ハ得とかハ又常信此真景紙翫味せし雪
筆墨ハ歎あはまると此子の圖紙賞を事誠ハ宜あたり

唐婦尺牘

南京きんぎんの商客崎陽丸さきざきの遊君ゆうきんハ去いて帰かへり遅ち緩くわんハ
かりりまほその婦妻書紙ふさいしよよせて諫いさめたるよ其書翰しよかんを

通詞某よりとひ得て或人ハ贈るその文ハ曰く

荷錢貼水堤柳鳴蜩遥想

相公與時多福貴體康泰為慰茲啟者自別以來
倏經四月有餘家中

翁おきな兩大人玉體全安無庸掛念也至于朝夕侍奉左

右妾雖不才自當留心其一切諸務妾自料理再
見輩攻書雖有先生教誨然妾亦當日夕勉勵大
女亦安吉女婚今春闈得第進士是為萬幸但妾
近聞相公在崎迷戀煙花使妾亦為未信因
相公在家凡事皆有斟酌况飄洋渡海莫不為名

此頃形の小法師元極長崎にて遊君小まよひむつびの
いよ一吾身もまよひ思ひやぶい法師元極屋と元ま
葉のあつふ古指引あはし殊灘ふさゆよい海城
渡りあ六名の為利の為よいハをど左程あるまのおへ
ま一いんや吾身八宿元を獨心細き燈城かづとま
辛苦い一いもまぎよいのをわりごと一ハ法師元極必いづら
なるを小迷ひ昔の契り城あ多ぶひあきれまぐい能い辨
下さる一ハ家門の幸とわい文とて上言葉そや気小
肖き小事あ夜共あゆみ路りいハ糸あ細小八重て上
屋い先八便りまをせ法師極體お向い

伊孚九の名の事

好古日録小伊海が父嘗て海外小貿易をある夜東海
洋中ふし七男子生ると夢見て家小還まハ男子城安
産を即感夢の夜あり故小海と名づけ孚九と字を
享保十一年廿八番の船小乗して始て長崎小来る延享
中小いり廿餘年の間往来をその寫を書画世上小賞を
らま最風韻ありと云々
予按る小孚九山水風款尤妙大雅池翁を此愛より
南宗小入るを越得たりと思はる又四君子あり舶来餘
人小比ままハ 此邦小あるを稀あり多く伊孚九を

款字をさるゝものあり或ハ雲水伊人とせし或見ること
あり又桴鳩とせし意或考ふる小論語小道不行乘
桴浮于海とある小よりて名ハ海字ハ桴鳩とせし
又華野耕父とせし印或用ハ伊尹の有華の野小耕
せしと云意小よりてつま小を高上の見と思はる其
人とありありて知る處一或ハ扇工小名ある由清人
某氏の筆記小見あり

三酸圖誤りの事

杏園が記小云世小酢吸の三聖の圖といふものありて孝子
孔子釋迦の像或畫り按る小趙孟頫が東坡懿蹟

圖と云その一卷あり其中小云東坡黃門魯直と共小佛印
或訪ひ一時佛印云吾桃花酢或得多り甚美なりとを
共小をたて其眉或顰む時の人稱して三酸とを志すハ
東坡山谷佛印を何やまうて老孔釋といふまづ一僧横川
京華集小三教吸醋圖詩云公翁乞醋到其鄰替膊忍
酸寒迫身李白題詩妙於畫舉杯邀月影三人然或ハ
此頃より誤り来る大竹氏家花明黃應禎臨寫懿跡圖或見小此事奇異本の事追て可考
按る小虎溪三笑圖ハ此酸吸小類せし圖あり三笑ハ僧
惠遠陶淵明陸脩靜とを三人共小時代不同をまじり
後人の作をて取合せしものありまづて此類誤り小似て

阿也まうらぎるあり皆古圖コト小仿コトて後人の作りコト一々の多

春畫ハルガヒ火災ヒ除ハるコトの事

漢書景十三王傳云畫屋為男女裸交接置酒請諸父姊妹飲令仰視画廣川王子海陽とあり春畫ハルガヒこト小權輿コトとありと覚ゆ青藤アヲ史シ小コある士人シ花書ハナガキ甚多シ其櫃ヒツ毎ヒツ小必春画二冊づツいま置キり或人ニその故コト或問ニふ是火災ヒ或ハよク厭勝ハツありと云フりトぞ此邦コト小てハ鎧櫃ヨロイ小必春画ハをハつクと云フこトいつの以ヨリ始メりコト未考ハ又月ツキ密雪ヒツ鼎ツツが傳ハ小明和中京師火災ありある典舖テンポの倉庫クラ小彼雪

鼎が春画あるが為ハ小火ヒを除クこト見ゆ路史ロシの説ハ小よクまシるコト小也

漢土カン浮世ウキヨ繪師エシの事

五雜俎第七曰姑蘇有張文元者最工美人俗中之神仙也ハ是此邦コトの菱川ハシガハ師シ宜宮イミヤ川カハ長春チヤウチン西川シキヤウ祐信ユウシンとハの類ルイあるコト欲ハよく人ニ世平生セハシヤウの情態シヤウタマシ或ハうクて絶技ゼツギとハ一ヒツ今世イマセ又京師キヤウシ小乘龍セリヤウ江戸エド小國貞クニタカあり師シ宜長イチヤウ春チンとハ異イなるコトまシどノよく風俗フヤクの情態シヤウタマシ或ハ畫カキて世セの人情ニヤウジヤウ或ハ動ウツこトとハ小至シるコト一ヒツ望ノゾ是又その妙域ミヤウイキ小入イりコト者モノ小一ヒツて得エるコトき伎能ギノウあり

西川祐信風



探三齋縮寫

菱川師宣風

承應明曆頃風



月岡雪鼎風



此風俗の圖は浮世繪に於て
ちたふして村世のふゆを記すもの

和漢人物を画く者畫格の高きまふいつりてハキマ
かぞふるふいと何阿まど仇英ハ此邦の一蝶舜奉ハ
此邦の應奉ハおのづから姓名の文字の似るもの奇なり
といふ也

英一蝶女達磨の圖

題半身美人圖

解大紳

千般體態百般嬌。不畫全身畫半腰。可恠畫工無
識見。動人情處不曾描。

題西施半身像

李笠翁

半紙天香滿幅温。捧心餘態尚堪捫。丹青不是無

完筆。寫到纖腰已斷魂。

世ハ美人城達磨ハ畫ハ右の詩をどふより画工の工夫を悟
道の意越えて細腰ハ達磨を畫ハ思ひハ此決山崎
美成が随筆越見ハ女達磨といハ英一蝶が画き初め
とぞ昔時新吉原中近江屋の抱半太夫と云遊女ありハ
後ハ大傳馬町の商家ハ縁付よりその家ハ人々集りて何を
と、そののりの序ハ達磨の九年面壁の話を志し、そのハ
この字をまき、て九年面壁の坐禅ハ何不どのこと、あるべき
遊女の身の上を致日、その日の心づみハ畫夜見せ越はる、と
面壁ハかゝることあり、達磨ハ九年已ま、ハ苦界十年を越

知... 卷之二

達磨より毛悟道志ありとて笑ひ多しとぞ此話一蝶がき
てやぐそ半身の達磨を傾城の款小画き多るが世上はやり
て扇團扇煙草入をど小女達磨といひ多るとも市川白
猿その繪の賛ふ

その毛さうんは誰ぞ

九年母も粹よりつて一あま味め

とり白蛾題し多るとぞ又素外が手引草小祇空

九年何苦界十年をなこころも

と是まら面白き白なり何さ尚英一蝶ハ何事ぞも顔敏乃
おける人しそ世人の氣城もるも早くら小心付一ふね

應舉寫生小妙成得一事

應舉寫生の工夫其妙成得多しと本朝古今及ぶ者あり
去るも共瀑布登鯉圖を見る小鯉魚瀑布の中ふあまじバ
登ること成得べしとぞこま登鯉の本意ふあまじと云者あ
按る小此圖高田敬輔より出て楯取真彦をど専ら画く
まをりその登る所ハ本意ふあまじ共應舉が畫く所ハ其
工夫の妙なる瀑布の中小しそ形像生るがぬく真小登るが
如く小見内應舉をそより登鯉の圖を知ぬふあまじと
あまじ共新意成出しそ寫せしあまじと一巴王維が表安
卧雪の宅邊小青とある芭蕉葉小雪成つそせしが如き

名書画集二編 卷之二

同日の談あるべし又幽鬼の圖を寫さず亦ある婢女晚景も
是を以て氣を失ひしこと口碑に傳へありしこと妙境なり
へむといふことあり其工夫は壯女の死せる者の面相を見て
画き初ると云其真蹟を見るも常の顔面にて眼中に意
あるのまあり又江戸本所押上天羅山真盛寺に應挙が
畫する地獄變相圖あり筆力精神の妙夢幻のうちに
地獄を見るごとく筆者も冥府に至りて歸りしもの
疑ふ誠は地獄の寫生なるべし又人物花卉鳥獸蟲魚
小動物を實によく生動の態を以てせり是ぞ能手靈
紙作りてを又よく實とまざるものあり韓非子も客有為

齊王畫者齊王問曰畫孰最難者曰犬馬難曰孰易
者曰鬼神最易夫犬馬人所知也且暮罄於前不可
類之故難鬼神無形者不罄於前故易之也外儲說
左
實も眼前に見る所ハ世俗是を評し上古のことハ學者こそ
紙評も鬼神ハありてハ見る者なき故圖様定まらざ
る共又拙工の手より出ざるハ看る者の心を悚動するも
いふ

東坡曰余嘗論畫以為人禽宮室器用皆有常形
至於山石竹木水波煙雲雖無常形而有常理常
形之失人皆知之常理之不當雖曉畫者有不知

故凡可以欺世而取名者必托於無常形者雖然
常形之失止於所失而不能病其全若常理之不
當則舉廢之矣以其形之無常是以其理非高人
逸才不能辨

古玩稽古畫工小杜撰多事

道家佛說の寓言より圖を作りたり或ハ能散樂の景を
寫せたり程々人物小作り張良の龍小騎類ひ是を
関羽青燈看書圖を今様のどち本小何れも古昔乃書
籍ハ卷物なり魏晉の頃ハ今の佛經の如く折本なり中疊
以舉手為率と南史

小見一又隋書經籍志小零疊

の字あり関羽の看書を折本なるべし今の如きどち本を
胡蝶装とて宋小始ると云又漢以上の人紙画く小頭巾幘帽
紙服せし圖甚多し是又誤りなり漢以上ハ冠をありて
頭巾の類ハ無きこと也 此邦を源平戦争の圖ハ鎗ハあり
るものも皆長刀なりなり又兜をを赤落さきなる者乃
頭ハ鳥帽子なり一鎗ハ足利家の末より出来あるもの
なり此類和漢とも小わづる小いと偽りあり也
因云孔子常小章甫の冠をを戴き縫掖の衣紙著る
多し一紙魯公儒服なりそいやと問ふ小卷て壯し
魯小居り長しと宋小居りハ二國の俗小從ふなり

儒者の服とを別よハ等々いこのさほひしを 此邦の
ことよ似たること有り肥後の数茂二郎先生大板の中井
竹山先生城初て訪ひ時冬あり一が薄羽織を着
あり竹山先生性しとていりありまバ先生ハ夏衣を着
とありと問ひまししハ茂二郎先生答て國許城夏出立
いひありとを其質朴ありて知る處一又云高陽山人の
著せし畫談雞肋といふものありよく画家の謬りを辨
しありまバ初学の人披覽して益ある處きあり

第一義施無畏等の額字の事

宇治黄蘗山第一義の額ハ高泉和尚の筆あり禪師この

額に書せし時弟子大随和尚傍に見居て是ハ何し是ハ
見苦しとて凡八十四枚ふまびつる時大随便事ふり高泉
和尚ありし書きたるを大随の居る間ハ筆放つて
書ましハ大随歸り来て大賞し是ぞ山門を鎮守まふき
ものありとて手紙あて悦しとぞ此額ハ五枚目にて成就せし
東都浅草觀世音堂中正面ハ掛し施無畏の額ハ高天湫
が書まししとあり是ハ第一義の額ハ等しし是ハ何し
のまハ見苦しとて書しとて何まハ心よかなハきまを倦
つらまて其儘ハ捨長持のうちに入置し其後無程玄
岱病氣づきて卒去せし故門人等長持のうちにあり見

箱
卷之二

出して印章を加一掛く其筆妙世人の知る要あり
按る小只書のも小何れ人品も亦勝る故あり

服元喬畫事

南郭先生元京師の人あり壯年東都小来り其疾り
伴一後徂徠先生の門小へり詩文を以て都下小雷鳴を志
ま共画事あること八門生といども知らざる者あり按る小
元雪舟流より山水を得たり又花鳥紙を見一とあり其
寫せるもの至て稀あり周雪又八觀翁と款字せる有り
又無款あるあり秋玉山が服翁墨竹記小周雪の款字乃
事茲載せ又湯淺元禎が文會雜記小服子没後其書齋の

南郭先生之画



水也石也尺之寸家君画書室壁之一
其洶涌巖者別求之赤水濱
服元雄 □

信州櫻井氏藏

信州櫻井氏藏

壁山水の畫あり多し紙剥して門生等持去り多しと云
 記せり又毎年六月廿日品川東海寺中少林院にて二三
 軸展覧觀せし法橋吾山云南郭ハ山水好む癖あり多し
 家小居てハ至る所の風景紙手づつ壁小畫き是小向て
 常小愛せしき多し又門人肥後の隈本小自脩と云る學士
 あり元喬卒して後夢小木曾の山中より來まると云
 會一往事紙談じ且山川の美紙わらして一絶紙唱し
 危峯回合白雲間。一路崎嶇不可攀。依舊懸崖三
 百丈。臨泉寺裡老僧閒。
 此事紙書通ひて東都小告來る息仲英大小感歎一

風體格調他の人の腸小出む誠小夫子の靈ありめと會談の
 次ハ時と語り多しとありかの晋の羊祜が死しての後その
 魂名山小登るべしといひしもこの事小を臨泉寺を寢覺
 山と号む木曾路名勝の地なり

名工名畫同意の事

天明のころ金工の名譽あり長常ハ類ハなき上手なり
 應奉も書小於て上手なりしが智恩院宮家諸大夫榎
 田阿波守といふ人長常小柄紙彫りてよ應奉小繪紙
 かせんとありしは長常うけがひあり因て榎田氏應奉
 小繪の事紙志ありといひしは速小畫てあり故即ち

長常のそとふ持参してとゞき長常の此下繪めて
得るまじといひうらゝまはと問ひまは我ふほらきんと應
答ハ画の上をたまは我彫るか祢くせ哉其儘書り思
たが祢くせなれば常ふ直えと思ふ其癖哉彫らんとま
つて難き事なり癖哉まきんとて自ら久きものりま
あるる物語まは榎田氏その上の妙なる感して
小柄哉るまこと哉止むまきありとぞ

日本扇宋朝ふて稱揚せしむ事

皇朝類苑。風俗雜誌部曰。熙寧末。余遊相國寺。見賣
日本扇者。琴漆柄。以鴟青紙。如餅。搦為旋風扇。淡粉

畫平遠山水。薄傳以五彩。近岸為寒蘆。衰蓼。鷗鷺。立
立。景物如八九月間。艤小舟。渙人披蓑釣其上。天末
隱々。有微雲飛鳥之狀。意思深遠。筆勢精妙。中國之
善畫者。或不能也。索價絕高。余時苦貧。無以買之。每
以為恨。其後再訪都市。不復有矣。我朝の書唐山小
稱揚せしむことハ既小諸書ふて世人の知るところあり
按る小熙寧ハ宋神宗の年号 我朝白河天皇の時
是巨勢流々或ハ公家又ハ僧阿闍梨なるの畫めてえり
是より以來 我朝の書画又乏しむ此一事近世扇面
家と云古書画扇哉集る好事君子の為小記るせり

贊澤庵といふ事

大徳寺澤庵和尚のありて讚物多き故時の人讚澤庵といふ一や歌ハ鳥丸光廣卿小学びて修行の功を積むが
ある時光廣卿異見ふてひら小歌よむこと或止知らずと
のいぬことありといひ遣はさき一返り小夢窓有庭之癖
雪舟有畫之癖愚有和歌之癖と書て其奥小古歌或
人こふひとりの癖あるもの或はまよふゆゑを此の道
といひやまき一ふ是より光廣卿をゆゑて指南一とい
しとあり

探幽齋杉戸の畫の事

附贊辭の事

天龍寺塔頭某院の書院相戸の畫探幽齋の筆と稱
李白の書て瀑布なり是ハ嵐山今の戸無瀬の瀧小杉
戸向ひ一也その瀧或李白が見るさゆふ書たり此院焼て
新築となり一後まき一瀧小相戸の向ひまき無念と
いふ一是ホモ畫工の多くとあることとあるといふ

槐記云雪舟が枯木の枝小路鳥のとまりて甍或直下
ある畧小外小河をなす一磐石禪師の讚小水清魚見と
せしむるあり雪舟が画小をとりより水をなすは魚をなす
然る小かくのぬく瀆一あるより見まべり小も澄潭の清
潔なる小魚のありしきある或路雪の見付たる小少くを違

む九七積を書く小心得るべきことなり拙手の積ハ
畫と重言ふあること多しと云々

右ハ呼起の賛子して又畫家必此用意あるべきことあり
先古人一圖命むる小於て畫外小意の深きこと此察す
譬ハ一花片葉といども卒然画く小何ぞ先其情態
此思ひ其風致を考へ畫理の變此畫一千万無量の想
を積て一圖此作也是此落想と云々一画一未だ筆此
揮ふざる以前斯のごとく而後繁此を始き要此採て
練熟の手ふして易く畫き出せるゆへ小勿く意此
經ざるごとく見ゆまじと云々自ら心思獨運趣味厚重

あり方蘭坻曰作畫必先立意以定位置と云ふて
毛知る画一りの枯木白鷺圖のごとき水鳥ハ畫ら
ざまこと毛落筆前沙汀不見鮮鱗の工夫雪翁が著
想中ふ備りある事必定あるべし去る此妙手の
讚語此を呼起せしそのありん所謂無聲
詩と稱する毛物小應じて趣向此求免貯一就中
風調ある事此珠禽奇花切近的當小その儘画き
出し多しんとて綵花泥禽小ひりき此詩意小叶ふ
とハ云々且此小對して妙語の發むべき根跡を
なぐるべし因て名手の真跡小つりてハ減筆と繁手

と我論せんとる千金小替（かくく）益寶賞せらるる
るきあり

因ふ云書像の賛ふ左向の像ハ賛哉左行ふ書て印哉
右ふ押一右向の像ハ賛哉常のぬく右行ふ書て印哉左ふ
押をこと多し是ハ朱子文集の内方伯謨（か）小答る書ふ
六先生の賛の書様左右の辨（べん）あれそまゝに据（よ）まるをん
先達の説（せつ）あり臨池家（りんち）をよの考（えが）置（き）きりふこそ

蕪村翁書畫戲の記

謝蕪村（せんぶ）が書畫戲の記真蹟（しんじやく）哉所持（しよ）せる所（しよ）きども尺餘（しやくじよ）を
ハ此書ふ載（の）き事（こと）哉得（え）る故ふ文（ぶん）をう（う）哉（か）う（う）縮寫（しゆくしやう）を

書畫戲之記

我に妻（さい）子（し）眷屬（けんじやく）無（な）書畫（しよゑ）をもて妻
子眷屬（けんじやく）とす
我に朋友（とも）無（な）書畫（しよゑ）をもて朋友（とも）とす
我に金錢（きんせん）無（な）書畫（しよゑ）をもて金錢（きんせん）とす
我（わ）に衣服（いふく）無（な）書畫（しよゑ）をもて衣服（いふく）とす
我（わ）に家（か）ら田（で）地（ち）の井（い）川（がわ）無（な）書畫（しよゑ）
をもて家（か）ら田（で）地（ち）の井（い）川（がわ）とす
吾（わ）遊（あそ）ぶゆの書畫（しよゑ）交易（かうぎ）をわの心を
もて遊（あそ）ぶとす

吾に無師古今此名書畫をもてる師と
吾地獄極樂を以て書畫をもて天
地を以て神佛とす
予天下此法を字守りて備神此像畫
を安置すといへどもあて初る守我心醉
を以て神佛とす

卷七日お食ハ圖も書画此令

長子日を書畫に

送云て十二月

鳳凰都於

東也雅他を

守景醉興師画此媒贖を事

久隅守景号無下齋稱半兵衛探幽齋小業此受て名
手允此出あること世人の知る要あり常小豪放小酒
此嗜も時世の俠客の一黨を放逸又殊小其一の時
探画法印諸侯より三幅對此命ぜりし小常小丹青
いふありて日限小迫まり命のきりかき小至りて
漸ありて畫成る中人物左右山水何まを秀潤ありて
こと小音絶あり来と落款小及ばざりてありし守景一
日鯨飲の興小乘り来りて彼三幅此見て大に感歎や
まの手に拍ち音絶ことよるる事限ありて人の

何れぞと云ふに幸とて揮筆して其山水の山際より男
根強人頭となり其行列を醉筆してその儘天向ふ
倒き即ち軒雷の如く前後を去るも熟睡より折節
の候より催促の使来り一日限の延しと由法印
何れぞと云ふに落款せんと思ひし守景がこの何れ様故
大いふ阿まきも歎息してやまびよなく此より候ふ上
らまじく候も守景が人と云ふ候も知つたまひ故
いつれも其男根の行列は見えよ命ぜし法印やむ
こと誠得む即時小持系せし酔筆の妙灑と落
しとて超九なまきバ候ふも大いふ感しぬ且悦と云ひて

ある不ど名譽の所為奇なることあると作し其儘沙収
花となり今も寶物となまりとぞ

宮本武藏畫發明の事

宮本武藏の傳ハ武藝小傳小委しく記せり其餘画事誠
能まること誠志ある者ありある時主君より命りて君
の面前にて達磨を画する小甚と拙劣なまきバ其目を止め
武藏夜ふ入り寐卧をさる夫と工夫して物と夜ふ小起き
阿らう燈下にて画し小意小適ひて精妙小成まりその時
武藏門人小向て云々ハ我画いませ刀術は及ばむその故ハ主
君の作なまきバ成ほどよく畫んと思し心よりして却て甚



一藏縮字

拙劣なり。今我兵法以て畫。故不是。適意の作こそ
 ぞ。我兵術ハ太刀あつて立出る時ハ我をなく敵を無
 く天地破る見地なきハ恐る雲なき。相と画ハ劍道乃
 是本おそよむと語りたるをえ

按る小武藏ごとき勇士あてを主君の前あてハ臆せし
 見えたり是ハ祿あるゆゑ明時便殿お人の城刀りて書
 を御覽有。事あるお上の威お恐きて汗出手顫て
 字城おまこと城得たり。小陳復獨り動止安雅おて
 書法端正なり。是武藏と同日の談なり。友人の語お
 人多き處お人なき心あて事城おん屋。人なき處

あて人多きことあて事をなすべしと云ふに至言といふ
魚一

月舟空に轉合の白斌聞く事

續崎人傳正山和尚の條小洞家中興月舟和尚の事越載
又てふ一奇事越関する事あり月舟若うりる時遊行して
嵯峨野小日暮りきバとある菴りふやどう越求也一ふ五八
威嚴ある老翁あり一が和尚小向ひ禪徒ある詩越作る
魚一絶を関えんと云月舟諾して見まらぬ小獅子菴と
之る額あり即時賦して云

投宿嵯峨獅子菴半盞清燈語江南

とて轉合の二案ありとハむ時ふ主人聲越發して

夜来風雨忽地起紅葉秋成一二三

と附あり和尚志バ一感吟して目越ひつき見まらぬ家の合
消うせそ花々ある原中ふいとけし一あり古の都良香の
羅生門の詩をかる歎ひみやと吾山公翁が記ふ見くうこそこハ
月舟が若うりし時あるまはせ禪の外魔の侵一ともあやめん

蓋雪魚の印の事

長澤蓋雪名魚字氷計淀の藩士あり應挙の門人とあり
て毎朝淀より京師四條の應挙が宅へ通ふことありある時
寒氣甚く久通路小川氷りて魚の中ふあり一身とていさ

清人韓人琉人その他海外諸國の人和歌など紙録ギ
 事長崎聞見録琉球談紅毛雜話などを載せて人の
 知る所ありし小宮政の初舶來セリ孟涵九ある者殊
 小日本好むを容體紙を日本以外作せりとそ去るは能く
 和語紙覺て假名紙書と精妙なり兎角江戸の地口
 とりてそのありしあり

あつたに書やこの加を文字より今唐の書は假名
 紙の茶釜の解紙画きて

茶釜がたつたかおとすうはしん

又琉球人の歌

讀谷山王子朝恒

つるの

朝恒王子

おこもる

おこる

おこる

鏡山

くまのなき内代の鏡の山をまへ君のまをせの影をくまの
伏見の里あて

たまをくさひくまの草枕ひとり婦の夜の月影

不二の山城

人といふことよの葉を及らぬうの雪乃白妙

右の解種くまをくまの略しぬ

近世名家書画談二編卷之二畢

